

短歌史における口語と韻律の問題 —近代からニューウェーブまで—

文化創造研究科文化創造専攻クリエイティブライティング領域
13001CCM 白村麻紀子

修士論文要旨

現在、多くの口語短歌作品が発表されている。口語短歌は俵万智『サラダ記念日』の刊行によって、歌壇内外に広く認められるようになると同時に、新しい表現が現れた。その代表がニューウェーブ短歌であり、口語体を駆使したその新しい表現は90年代初頭から注目された。1950年代からはじまった前衛短歌運動では、近代短歌の改革が進められた。しかしその中で口語化は、唯一積み残された課題であった。そしてニューウェーブ短歌は、この近代短歌改革の最後の課題に取り組んだことになる。このようにニューウェーブ短歌については、文学史的な評価は定まっているものの、作品については文語が主流である世代には「わからない」という感想が多い。文学史における言文一致運動を参照するまでもなく、口語化とは意味をわかりやすくするためのものである。しかし短歌においては、口語化によって、作品が難解になるというねじれが起こっている。こうした現状を分析するために、短歌史における口語が文体にどのような影響をもたらしながら、作品を変化させたかを考察し、現代短歌における口語の意義について論じた。

一章では、小説を中心とした言文一致運動に影響を受け、歌人たちが口語に注目する様子をとりあげた。しかし実際には当時の歌人たちは口語を積極的に使用することを避けている。その原因のひとつとして、「写生文」を唱え言文一致運動に参加した正岡子規が、短歌における文語の使用を単なる「美観」の問題であると断じたことが挙げられる。また自然主義文学に触発されて、「短歌滅亡私論」を発表した尾上柴舟は、文語定型を使い続けることへの疑問を呈した。この疑問に対して石川啄木は、「一利己主義者とその友人との対話」のなかで、文体の自由と韻律の変革を訴えた。啄木は同論において口語を使用するならば短歌の韻律の変化は当然であるという見解を示している。次に1906年には、青山霞村の『池塘集』が初の口語歌集として刊行された。しかしここで霞村は、口語体の意義を単純に「外国人に読ませることが出来ること」というように考えており、短歌の生命である韻律の問題には言及されることがなかった。また文語短歌作品との差別化ができない作品も多かったため、それ以上に議論は進まなかった。

二章では、定型に対する疑問から起こった口語自由律短歌運動の成果を確認した。この運動

の契機となったのは、1924年の「日光」の創刊である。特に石原純は、青山霞村を中心とする口語定型派が、理論的な裏づけをもたないまま定型を使い続けていることに批判的であり、非定型を試みることを提案した。「日光」では口語自由律短歌の歌論と作品の発表が活発に続けられたが、資金難や有力同人の死などが重なり1928年には廃刊となる。しかしその後も口語自由律短歌運動は途絶えず、プロレタリア短歌や歌人らの活動に引き継がれていくことになる。プロレタリア短歌では、「文語定型」を「旧体制」と見なして徹底的な批判が行われた。しかしプロレタリア短歌は、口語自由律が短歌であることの根拠を示すことができず、「詩への解消論」が唱えられた。1929年には、自然主義歌人として評価され、「日光」にも所属していた前田夕暮が、朝日新聞社主催の空中遊詠をきっかけに口語自由律での作歌をはじめた。夕暮は、口語自由律による短歌が文語定型よりも、時代を把握する上で優れていることを説いた。また夕暮は、自作の解説など、常に口語自由律短歌の理論化に努めた。しかし次第にリズムがマンネリ化し、戦争によってその試みは中座する。

三章では、戦後短歌の新しい試みをとりあげた。塚本邦雄・岡井隆・寺山修司を中心とする前衛短歌運動は、虚構の「私」によって短歌に批判的な視点を導入すると同時に、韻律に変革をもたらした。これによって短歌は「第二芸術」という貶められた状況から脱出することができた。1980年代には口語短歌が登場しはじめ、ぎこちない口語文体や、文語の一部導入によって、表現に批判性をもたらす方法が模索された。中でもニューウェーブ短歌は、よりストレートな表現を目指した文体が特徴であるが、逆にそれを作品上の「私」に内向させることで、自分自身に対する批判を表現する文体を獲得しようとした。